

「“縫える先生”になろう！」子ども学ゼミでの実践報告（I）

白坂 文

SHIRASAKA Aya

本稿は夙川学院短期大学「子ども学ゼミ」において著者が指導する「“縫える先生”になろう！」というテーマで取り組んでいるゼミ研究について報告するものである。

本学の学生の多くは幼稚園教諭や保育士を目指している。園では生活発表会や運動会などの諸行事で先生が衣装を制作する場合があります。先生は“縫うこと”も仕事のひとつといえ、“縫える先生”は大変重宝される。また縫って制作する布玩具は手触り感がやさしく、子どもに気持ち良さや、ぬくもりを感じさせることができ、縫製技術やテクニックを学んで制作すると丈夫で長く使用できるというメリットもある。

そこで2015年度「子ども学ゼミA」での学生の制作作品の中からいくつかの事例を取り上げ、作品の考案・制作・発表という経過をたどり、ゼミ研究を通して学生が将来の保育者としての自信向上に繋げられるかを考察する。

キーワード：子ども学ゼミ、縫える先生、布玩具、縫製技術、保育者

1. はじめに

家庭科は生活実践力を養う教科であり、被服製作は実践に直接結びつく技能の習得に欠かせないが、被服の授業時間数は削減の一途をたどっている¹⁾。また、ほとんどの学生は、小・中・高等学校の家庭科教育を通して被服製作を経験してはいるが、その技能は学校の地域・規模・学科の種別により違いが見られ、その結果、現在の学生は被服製作に関しての習熟度に個人差が大きい²⁾。

また大学生の縫製技能に関する調査³⁻⁵⁾においても、被服製作に必要な縫製技術力の低下が明らかにされており、家庭科教育の小・中・高の連携が取れておらず、縫製技術を系統立てて学んでいないとの報告もある⁶⁾。この点についてはゼミで実施したアンケート「小・中・高校の家庭科で被服製作したアイテム調査」の結果(図1.2.3)を見ても明らかで、小・中・高の連携が取れておらず製作アイテムが重複したり、製作アイテムがぞうきんという驚くべき回答や、高等学校時に至っては1/4が被服製作を経験していないことが分かった。

このように家庭科教育における現状は、被服の授業

時間数の削減、ものづくりの機会の減少による知識・技能の不確かな定着、手指の巧緻性の低下など、製作学習を指導する上では困難点が多い⁷⁾。

とはいえ本学の学生はモノづくりを好んでいるということはアンケート結果の図4をみても分かる。また本学は保育、教育に関する専門的知識・技能を身につける意欲がある人材を求めていると入学者受け入れ方針にもあり⁸⁾、モノづくりに意欲的な学生が多く入学してきていると考えられる。被服製作の習熟度の程度はどうであれ、“縫うことが好き”で“縫える場所”が整ってさえいれば縫製技術を学び習得したいと考えている学生は多いであろう。

このような状況を少しでも打開するためにも、著者は縫うことによりモノづくりの楽しさを体感してもらいたい、“縫える場所”、“縫製技術を習得する場”を与えたいとの考えより、2014年度から「“縫える先生”になろう！」というテーマでゼミ研究を行ってきた。

子ども学ゼミの趣旨については、多彩な分野のユニットから学生の興味・関心のある分野を選び、さらにその技術を身につけることにより、学生の得意分野を生かすことのできる付加価値を有した教育者・保育者

を育成することをめざしたもので、他学にはない1・2回生合同ゼミ形式になっている⁹⁾。

ゼミは前期・後期の通年であるが、本ゼミは前期にフェルトや布を使用し、布玩具を考案・制作、後期には前期で制作した作品を応用発展させ布玩具を制作することとしている。その際、この布玩具を使用する時期の子どもの発達特性を予想しながら、子どもが布玩具を使い遊ぶことで何を感じられるか、何をできるかということについて制作意図や制作計画を着実に行わせた。

また、完成作品をゼミ内で発表し講評し合うことによって、他の学生の作品に触れて得られる“気づき”や“刺激”があり、今後の自身の制作作品に対してより一層創作意欲が湧く。本稿では前期・後期それぞれ1作品ずつ制作したオリジナルの布玩具の制作計画から完成までを事例を交えて紹介し、後期最終授業で行った最終プレゼンテーションを受け、自身の制作した布玩具について学生の間でどのような意識変化が見られるようになったのかを詳述する。

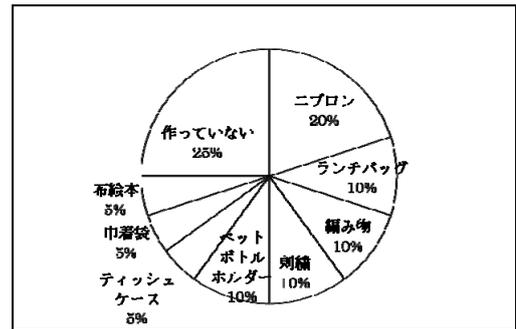


図3 高校家庭科での被服製作

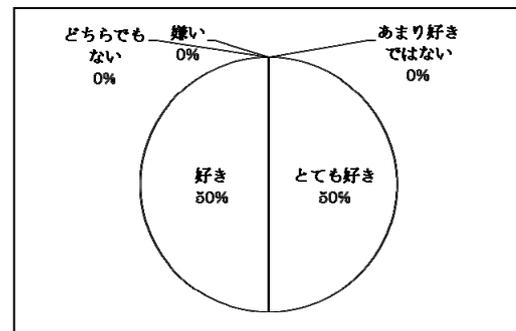


図4 モノづくりは好きか

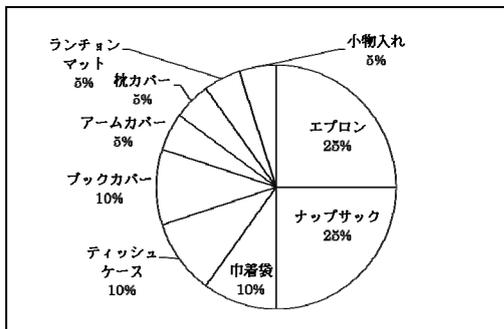


図1 小学家庭科での被服製作

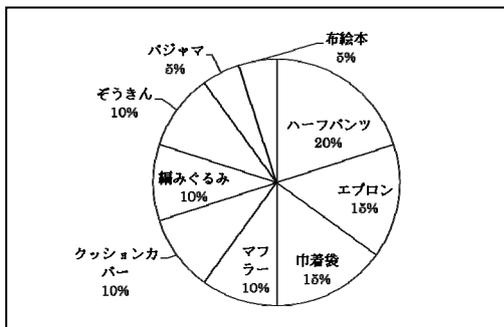


図2 中学家庭科での被服製作

2. 方法

調査期間：平成27年4月21日～平成28年2月9日

調査対象：本学児童教育学科白坂ゼミ受講者1年生10名、2年生10名

手続き：本ゼミでの布玩具制作経過（第1回ガイダンス～第15回プレゼンテーション前期・後期）までをたどり、後期の最終授業で行うプレゼンテーション、レポート、アンケートから学生の制作作品の課題や改善点、今後の展望を明らかにする。アンケートは質問紙法を用い、一部記述式とした。

3. 授業の展開と考察

3-1 研究活動への導入

表1は2015年度の授業計画・内容である。第2～3回の授業では手縫いとミシン縫いで作る布玩具の過去の作品（2014年度作品）を紹介し、制作者の工夫した点や縫製テクニック等を解説している。これにより学生は各自制作したい作品内容が具体化でき、制作に取り組みやすくなる。

続いて第4回目の授業では自身の制作作品の「テー

マ」、「この作品を子どもにどのように使用させるのか」、
「使用する子どもの対象年齢」、「工夫する点」、などを
具体的に検討し、完成予定日までのタイムスケジュール
を立てる。

第15回目のプレゼンテーションではひとりひとりが
自身の制作作品について説明しながら、「工夫した点
「反省点」、「後期に向けて」等を発表しお互いの作品
に対して講評を行う。

表1 2015年度授業計画・内容

第1回	ガイダンス
第2回	手縫いで作るおもちゃの研究 ※過去作品の紹介
第3回	ミシンで作るおもちゃの研究 ※過去作品の紹介
第4回	自身で作るおもちゃの計画 ※ { テーマ、スケジュール 材料、用具、準備物
第5回	おもちゃの制作 ↓ ※振り返り・途中経過報告
第13回	完成
第14回	レポート(感想と反省点等)
第15回	プレゼンテーションと講評

3-2 研究活動の内容(前期)

表2はゼミの前期作品である。作品の特徴としては、
1 回生は全員自身の名前が入っているフェルトの名札
を制作しているところである。名札の中に指人形が仕
込まれていたり、窓が開くとネコが見えるような「仕
掛け名札」を制作している学生がいるものの、全員が
名札制作を行っている。これについては、前期最終授
業のプレゼンテーションで、1 回生は玩具の種類や、
どのような意図で子どもに使わせる玩具が良いのかと
いう知識が浅く、なかなかアイデアが浮かばなかった
ため、ひとまずは実習で使用できる名札を制作したと
多くの学生が述べている。

これに対して2 回生の作品は子どもが触ったり使っ
たりして遊ぶことができる布玩具を多く制作している。
「手触り」にこだわっている作品が多く、使用素材に
ついてフェルトだけでなく動物の特徴を表現するた
めにフェイクファーを用いたり、電車の形を形成する

のに牛乳パックを使用したり、不要な軍手を使用し
たりとリサイクル意識や素材研究意識が随所に見られた。
また制作されたそれぞれの玩具には「知育」をテーマ
に考案し工夫を凝らしている様子が見える。

ここまでを見ると、1 回生と2 回生には縫製の巧拙
や縫製のテクニックに関してはそれ程大きな差は見ら
れなかったが、作品を考案する発想力や制作意図を明
確にする力、作品に創意工夫をするというアイデアの
豊かさにおいては大きな差が出ており、1 回生ではま
だ児童教育における知識や経験の浅さが影響している
ことが明らかとなった。

やはり2 回生は1 年間保育者になる為の知識を身に
付け、実習を経験し自身が保育者になるための意欲も
高くなっているということが作品制作にも繋がってい
ることが分かる。

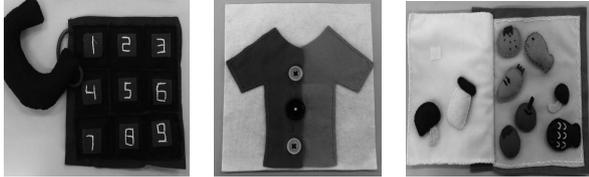
表2 前期作品

学年	氏名(作品)	前期作品	学年	氏名(作品)	前期作品
1 回 生	M・M (仕掛け名札)		2 回 生	K・S (三匹の子ブタパネル シアターパーツ)	
	O・E (名札・小物入れ)			M・M (布絵本パーツ)	
	H・M (仕掛け名札)			I・E (抽選箱)	
	K・H (名札・トートバッグ)			K・M (手袋シアター)	
	S・R (名札)			N・H (手袋シアター)	
	Y・N (名札・エプロン)			H・Y (赤ずきんちゃんパ ネルシアターパーツ)	
	I・A (名札)			H・Y (布絵本)	
	O・T (名札)			Y・N (野菜色々布絵本 パーツ)	
	K・K (名札・指人形)			T・C (食育パネルシアター)	
N・S (名札)		M・H (電車パーツ)			

次に前期最終授業で行ったプレゼンテーションで、
各自が制作した作品についての説明、創意工夫した点
や反省点、後期に制作する作品への展望について述べ
たものの中から事例①から事例④の4点を紹介する。

【事例①:2回生 M・M 前期作品】

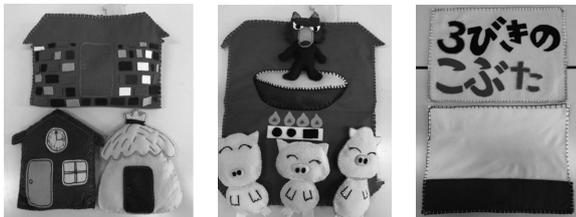
テーマ「さわって遊べる布絵本のパーツ」



- ・電話のボタン部分は立体的。押すと音が鳴るように中に「鳴き笛」を入れ、子どもたちに押ししたら音が鳴ることを覚えさせるようにした。
- ・ボタンの留め外しで指先の発達に繋がるように、服の左側にボタン、右側にボタンホールをあけた。
- ・冷蔵庫は野菜や魚を出したり入れたりできるように土台を「マジッククロス」で作り、野菜や魚の裏面にマジックテープを縫い付けた。
- ・できる限り手縫いにこだわり、電話のボタンの数字や魚のウロコも手で刺繍した。
- ・今はボタンを押すと音が鳴る、ボタンの付け外し、マジックテープの付け外ししか仕掛けがないので、後期には仕掛けの種類をもっと増やしたい。

【事例②:2回生 K・S 前期作品】

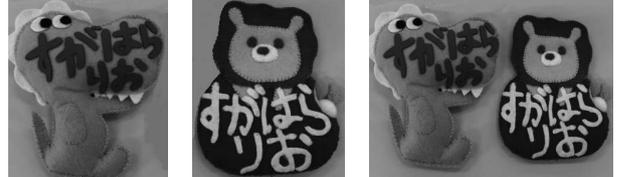
テーマ「三匹の子ブタのパネルシアターのパーツ」



- ・とにかくこだわったのが手縫いで、「ブランケットステッチ」を先生に教わった。ブランケットステッチは見た目がきれいなだけでなく、フェルトや布の端をほつれにくくする働きもあると知り、機能的な縫い方ができるようになった。
- ・レンガの家、木の家、わらの家のそれぞれの特徴を考え、レンガ部分はフェルトでアップリケ、丸太の年輪やわらの感じなどは刺繍で工夫した。
- ・レンガの家は二つ折りになっていて、ホックを外せばお湯の沸いた鍋が見えるように場面が変化するようにした。
- ・後期は壁に掛けても使えるようにして、大きな作品にしたい。

【事例③:1回生 S・R 前期作品】

テーマ「名札」



- ・最初の授業で紹介された作品を見て、私も実習に使える名札を作りたいと思った。
- ・実習に行った時に男の子と女の子それぞれに興味を持ってもらえるように恐竜とライオンの2種類を作り、日によって変えられるようにした。
- ・名前の文字を全て自分で切って作ったところが頑張ったところ。すごく難しかったけど、曲線が切りやすいはさみを先生に教えてもらったので上手くできた。道具についての知識も増えた。
- ・最終授業のプレゼンテーションでは先輩たちの作品は子どもが楽しめるものになっていてすごいなと思った。後期は私も子どもが使えるものを作りたいと思う。

【事例④:1回生 M・M 前期作品】

テーマ「仕掛け名札」



- ・工夫したところは「仕掛け名札」となっているところで、中を開ければ指人形が入っていて、子どもたちが遊べる場所。名札の裏面には小さい果物をたくさん作ってマジックテープで付けたので、ここでも遊べるよう工夫した。
- ・子どもが使うことを想像すると、とても小さくて、指人形を縫うのが大変だったが、顔の細かい部分までこだわりを捨てず縫えてよかった。
- ・前期の作品を後期にも応用させるよう考えられなかったのが反省点で、プレゼンテーションで先輩たちの作品を見て、細かい部分まで工夫されているなど感心した。子どもがどう使うかとか、どう遊ばせるとか考えてあった。後期はもっと子どもが使って楽しめるようなおもちゃを作りたい。

3-3 研究活動の内容（後期）

図5は後期に制作したアイテムの内訳で、表3は学生の作品をまとめたものである。ここで特筆すべきは、1回生のアイテム数の変化である。前期と比較してアイテム数が圧倒的に増えている。前期では1回生のほとんどが制作する作品のアイデアが出ず、子どもたちが使用する玩具ではなく、実習等で自身が使用する名札を制作していたのに対し、後期では子どもが使用することを目的とした布玩具を考案・制作しており、前期の1アイテムから5アイテムと種類が増えている。

また、このような傾向は2回生にもみることができ、前期作品と比較すると4アイテムから6アイテムと種類が増えバリエーション豊かな作品となっている。

作品内容については1・2回生ともこの布玩具を使用する時期の子どもの発達特性を予想しながら、子どもが使い・遊ぶことのできる作品を制作できており、これには前期のプレゼンテーションの内容から多くのアイデアや工夫、布玩具制作の意図などを学べたと多くの学生が感じている点にある。特に2回生の制作作品やプレゼンテーションの内容に1回生は刺激を受けており、2回生同士もお互いの作品制作に大いに良い影響を受けたと感想を述べている。

このように前期の反省を踏まえ、1・2回生とも“この玩具の使用で子どもたちが何を感じられるのか”、“何をすることができるのか”という点について制作意図をより確実に検討できるように変化している。このことはゼミを1・2回生の合同形式としていることが効果的にはたらいっているといえる。

また◎印の2回生4名については前期の作品を応用発展させ、後期作品に連携させており、制作時間も前期から後期と長く使っているため、迫力のある大きな作品や、非常に緻密な仕掛けが施された作品を完成させている。

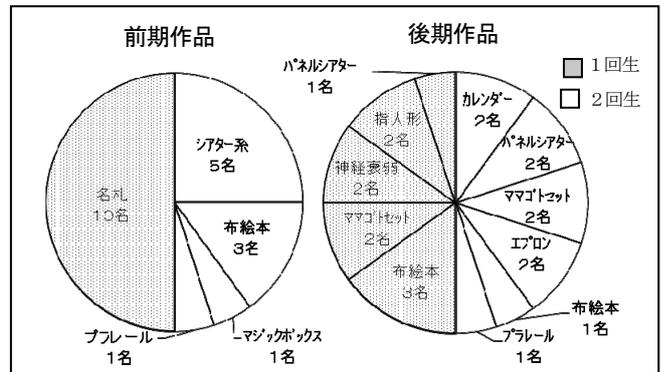


図5 作品アイテムの内訳

表3 後期作品

学年	氏名 (作品)	後期作品	学年	氏名 (作品)	後期作品
1回生	M・M (すき焼きのままごとセット)		2回生	◎K・K (三匹の子ブタの巨大パネリアター表裏)	
	O・E (森の音楽家パネリアター)			◎M・M (さわって遊ぼう! 布絵本)	
	H・M (神経衰弱)			I・E (アンパンマンエプロン)	
	K・H (布絵本2種)			K・M (マグネットの布カレンダー)	
	S・R (布絵本)			N・H (エプロンアター)	
	Y・N (お正月セット: おせち, 福笑, 鏡餅)			◎H・Y (赤ずきんちゃんパネリアター)	
	I・A (布絵本パーツ)			H・Y (お弁当)	
	O・T (神経衰弱パーツ)			Y・N (布カレンダー)	
	K・K (神経衰弱パーツ: 指人形)			T・C (お弁当)	
N・S (赤ずきんちゃん指人形)		◎M・H (牛乳パックの電車のプアレル)			

次に後期最終授業で行ったプレゼンテーションで、各自が制作した作品についての説明、創意工夫した点や反省点、前期・後期を通して自身の制作作品がどのように変化したか、また縫うことを通じて自信の意識がどう変わったかを述べた中から事例⑤から事例⑧の4点を紹介していく。

【事例⑤:2回生 H・Y 後期作品】

テーマ「赤ずきんちゃんのパネルシアター」



- ・場面は赤ずきんちゃんがおばあちゃんの家に向かう森の小道の背景と、おばあちゃんの家の中の背景2場面をパネルの表裏で表現している。
- ・木の中にキルト芯を入れて立体的にしたり、緑の部分はマジッククロスを縫い付けて、人形が付くようにした。



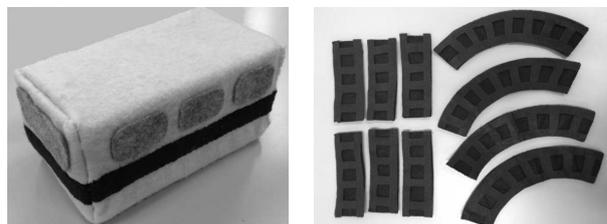
- ・おばあちゃんを布団の中に入れて寝かせることができたり、オオカミのお腹はおばあちゃんが入るよう袋状にしたり工夫を凝らした。
- ・オオカミの毛並みはフェイクファーで表現し、子どもたちが触った時に、動物っぽい手触りを感じられるように工夫した。



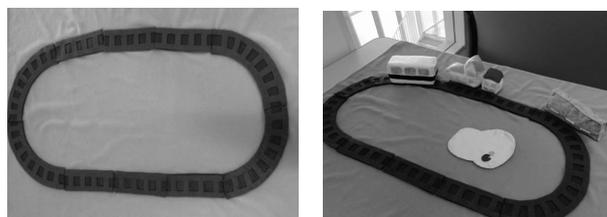
- ・前期はまだ手縫いに慣れていなかったが、後期になると縫製方法も身に付き、多くの縫製方法を学ぶことができ、スムーズに作るようになった。
- ・子どもが触って柔らかい手触りを感じて欲しい。布とフェルトで制作したので落としたりぶついたりしても柔らかく、怪我をしないところが布玩具の長所。
- ・就職する園では是非使いたいと思う。宝物ができて大変嬉しい。

【事例⑥:2回生 M・H 後期作品】

テーマ「牛乳パックの電車のプラレール」



- ・エコを意識し、牛乳パックをリサイクルして立体的な電車にした。電車の中には臭いの無くなった消臭ビーズの粒々を入れ、電車を動かすと音が鳴るように工夫した。
- ・線路は直線と曲線のパーツを作り、組み合わせによって子どもが色々な形にすることができるようにした。



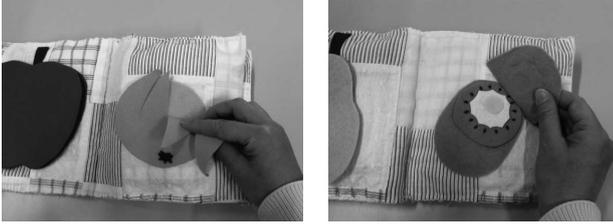
- ・線路は裏面にマジックテープを付け、地面のマット(マジッククロス)に固定できるようにした。
- ・駅や建物、池は子どもたちが自由な場所に移動させることができるようにし、これからも建物や木々といったアイテムを増やしていく予定。



- ・電車と線路だけでなく、駅や建物、池を置くことによって街の雰囲気が出るし、レイアウトを自由に変えることによって子どもの想像力を育てることができる。
- ・反省点は電車を1両しか制作できなかったところ。最初の計画ではJR、阪急、阪神というようにいくつか阪神間の種類の電車を作り、自分の住む街をレイアウトして楽しめるようにしたかった。
- ・踏切とか信号機を作るとより本格的なプラレールになると思うので今後作っていきたい。

【事例⑦:1回生 K・H 後期作品】

テーマ「布絵本2種」



・これは0歳～2歳の乳幼児を対象とした布絵本で、果物の中身が学べる簡単な内容にした。皮をむいたら中身が出てきたり、開くと果物の断面が見えるようにした。



・これは3歳～5歳の幼児を対象とした布絵本で、幼児用より少し手先の運動の難易度が上がっている。

・子どもたちが普段着ている洋服の脱ぎ着の練習（スナップ、ボタン、ファスナー、マジックテープ）ができるようにした。



・子どもは年齢ごとに発達段階が違うので布絵本も「乳幼児用」と「幼児用」の2種類にした。

・小さな子どもが落としたりぶついたりしても布なので大きな音が出ないし怪我の心配もなく、汚しても洗濯できる点は布の長所だと思う。

・前期のプレゼンテーションで2回生の先輩方の作品が凄かった。制作したおもちゃを使わせ、子どもたちに何を学ばせるのかという目的をきちんと考えていると感心した。私も先輩に影響を受け、後期は子どもたちに手先の運動をさせる布絵本を制作した。完成した時は達成感でいっぱい、満足しています。

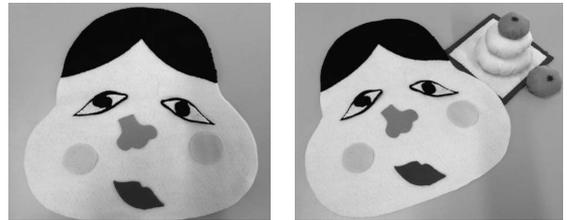
【事例⑧:1回生 Y・N 後期作品】

テーマ「お正月セット」



・日本の伝統的な習慣にふれさせることを目的として、お正月のおせち料理を全て手縫いで表現し、重箱に詰めた。おせち料理の種類（黒豆、数の子、ごまめ、酢ごぼう、かまぼこ、伊達巻、栗きんとん等）の由来を学ばせたり、各家庭のおせち料理がどんなものか話題を広げることができる。

・重箱から料理を出して箸を使って詰めなおすことで、子どもの巧緻性を高める効果を狙っている。



・福笑は目、鼻、頬、口、土台の顔をそれぞれフェルトで制作した。福笑は日本の伝統的な正月の遊びであるが、最近ではなかなか遊ばれていないと思い、昔の良い遊びを見直す為にも制作した。



・私は将来小学校の教諭を目指しているので、小学校で使用する目的で、冬の日本の文化を学ばせる授業での教材として活用したい。

・前期は何も思いつかず、名札とエプロンを制作したが、2回生の先輩や1回生の友人達が制作した作品を見てすごく考えさせられた。何事にも目的があり、その目的を達成させる為には、どのように工夫していくか等、今回の後期作品は自分なりに考えながら制作でき、満足のいく作品が完成して嬉しい。

4. 結果と考察

図6はゼミで実施したアンケート「後期に制作した作品で子どもの何を養いたいですか」という問いの結果である。「手先の発達」(20%)、「想像力」(20%)、「知識の習得」(15%)、「自主性」(15%)、「記憶力」(15%)、「協調性」(10%)、「視覚感覚」(5%)との回答が得られ、それぞれの学生が制作する玩具に対して意図を持つようになった様子がわかる。

図7は「布玩具についてどう思いますか」との問いに対してであるが、「あたたかみがある」(30%)、「柔らかいので怪我をしない」(30%)、「丈夫で長持ちする」(20%)、「洗濯でき衛生的」(10%)というように布玩具を使用する子どもの立場に立った上での利点を挙げている。しかし一方では、「制作に時間がかかる」(5%)や「制作に忍耐力がいる」(5%)と、制作者の立場で感じる本音も垣間見えている。しかしながら、90%以上の学生は布玩具を好意的に捉えている。

また図8の「このゼミを受講して得られた成果は何ですか」という問いについては、「縫えるようになった」(50%)、「知識・技術が向上した」(25%)、「玩具研究ができた」(15%)、「制作意欲が高まった」(10%)と回答しており、縫うことを通して学生各自が十分な成果を得られたと感じている。

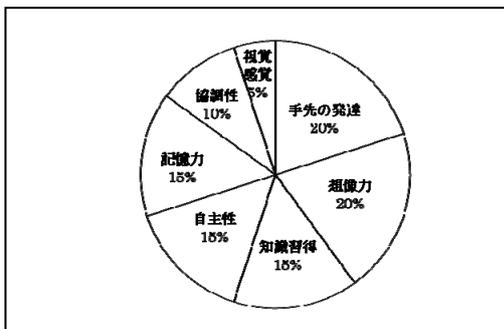


図6 後期に制作した作品で子どもの何を養いたいですか

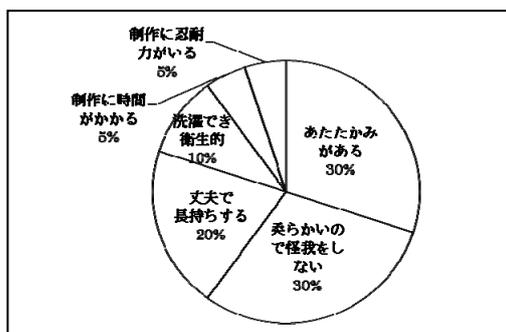


図7 布玩具についてどう思いますか

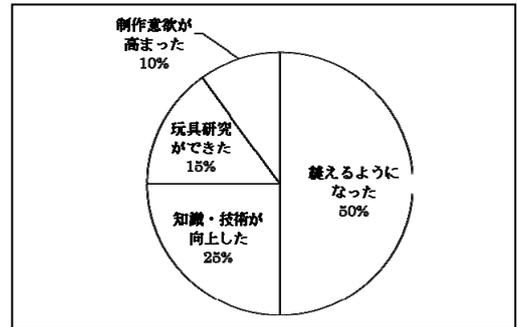


図8 このゼミを受講して得られた成果は何ですか

5. まとめ

学生たちはゼミ研究を通じ、将来自身が保育者として現場に立った目線で、オリジナリティ溢れる布玩具を『考案』する発想力を身に付け、『制作』する縫製知識・技術を習得し、『発表』によって伝えるプレゼンテーション能力を身に付けることができた。これは前期のプレゼンテーションと、中間期(第5回～)の途中経過報告、後期のプレゼンテーションから著者が感じたことであるが、前期と比較すると後期のプレゼンテーションでは格段にプレゼンテーションの能力が向上していた。ある学生は「お弁当の歌」を歌いながら布玩具の使用方法を紹介したり、またある学生は「そらめくんのベッド」の話をしながらエプロンシアターで演じたりと、プレゼンテーションを聞いている学生たちも著者も引き込まれてしまうほどであった。

本ゼミでは“縫える”ことを目標にしているとはいえ、布玩具の制作で終わりというのではなく、プレゼンテーション等を行うことにより、自身の意見をしっかりと発言できるようになることを重視した。それが出来なければ、子どもたちに自身が制作した布玩具の良さを伝えることはできず、このプレゼンテーション能力は、学生が将来園に就職し現場に立った際、子どもたちとのかかわりの中で必ず必要となり、プレゼンテーション能力の向上は保育者として必ず手助けとなることは明確である。

「“縫える先生”になろう！」というテーマでゼミ研究を行ってきたが、布玩具を制作し、縫えるようになっただけでは、ただの自己満足になってしまう。布玩具を制作してそれで終わりではなく、その玩具を使用し子どもたちをどのように遊ばせるかが重要であり、

その玩具を使い楽しく遊んでくれるか、これがある意味、子どもたちからの「評価」であると著者は考える。自身で制作した玩具を子どもたちが使用してくれるからこそ、学生たちはより一層自分に自信を持つことができる。よって本ゼミでの取り組みは、布玩具の制作技術の習得と、布玩具を使用し子どもたちと遊べる能力を身に付けることができ、学生の保育者としての自信向上に繋げることができたと考える。

6. 今後の課題

2014年度より「子ども学ゼミ」を担当して2年である。この間、学生たちはオリジナリティ溢れる布玩具を考案・制作し、作品完成時には大作を発表し著者を驚かせてくれた。児童教育学科に入学する学生はさほど縫製が出来ないという勝手な解釈が恥ずかしくなる程学生たちは素晴らしい作品を制作している。

本ゼミ受講生は縫うことが好きで、自分自身を不器用だと思っている学生であっても縫製技術を学び、自分の力で布玩具を制作したいと感じている。ゼミの時間は1コマのみで、制作するには短い時間であるが、それでも学生たちは前期・後期それぞれの最終授業を行うプレゼンテーションに向け、宿題になっても自主的に作品を仕上げてくる姿勢には感心するばかりである。

著者は兼ねてより、ゼミ研究を通じ制作した作品をゼミ内での紹介だけに留めておくのは大変に惜しいことであると感じている。ゼミ生の制作した作品を幼稚園や保育園の子どもたちに使用してもらい、使用感や遊び易さ等の意見を聞く機会を設けることができれば、学生にとってより一層今後の布玩具研究について意欲が高まり、保育者としての自信に繋がる。学生の頑張りに対し、その結果をフィードバックしてやることこそが教育として重要であると考え、ゼミで制作した布玩具の展示や、園との連携について今後の課題と検討していきたい。

1. 引用文献・参考文献

- 1) 川合みちる, 谷口明子, 平嶋憲子, 中嶋たや, 菱田道代, 河 智恵, 鈴木洋子「小・中・高等学校の系統性に配慮した被服製作題材の検討」教育実践総合センター研究紀要 Vol. 2008, 3 奈良教育大学
- 2) 工藤寧子, 奈良拓哉, 葛西美樹「被服構成実習支援

のためのマルチメディア教材開発」東北女子大学・東北女子短期大学紀要 No. 50, 2011

- 3) 木村恵子, 吉野鈴子, 中尾時枝「中学校技術・家庭科学学習指導要領の改定による女子学生の縫製技術取得の変化」芦屋女子短期大学研究紀要 第35号, 2010
- 4) 中尾時枝, 吉野鈴子, 木村恵子「学生の縫製技能について」家庭科教育, 2004
- 5) 吉野鈴子, 木村恵子, 中尾時枝「短期大学の被服製作十実習における学習指導要領改訂の影響—学生の技術と意識変化—」日本家庭科教育学会誌, 2007
- 6) 岡本文子「家庭科教育の変容と様相について」筑紫女学園大学短期大学部紀要, Lo1. 7, 2012
- 7) 鳴海多恵子「家庭科, 技術・家庭科における題材・教材」KKG ジャーナル, Vol. 49-1, 2014
- 8) 夙川学院短期大学アドミッションポリシー (2015年度現在)
<https://www.shukugawa-c.ac.jp/exam/admissionpolicy/>
- 9) 学校法人夙川学院, 平成24年度事業報告書

ピアスーパーバイザーからのコメント

子ども学ゼミの授業をとおして、学生が「縫う」という技術を身につけることにより、将来の保育者としての自信につなげていくという点で、保育系の演習授業を担当している様々な分野の教員にとって共有すべき知見があると思われます。保育にかかわる実践的な授業の積み重ねが、学生の自信となり、保育者の専門性向上の意欲につながるのではないのでしょうか。この知見が、多くの先生方にご理解いただけることを願っております。

(担当：児童教育学科 園田雪恵)